



河合文化教育研究所  
主任研究員 丹羽健夫

# 教育を 読む

『津軽海峡・冬景色』や『青春時代』『思秋期』などのヒット曲をはじめ、通算5千曲の作詞歴をもつ阿久悠の、少年時代の自伝的回想小説である。終戦から阿久が野球に狂うまでの約三年の記録であるが、その三年間はまさにこの国はじまって以来もっとも波乱に満ちた時代であった、といっても過言ではないであろう。その意味でも興味深く、かつ貴重な時代風俗記録でもある。

昭和20年、小学校3年生のこの小説の主人公である、足柄竜太が住む淡路島にも敗戦と食糧難の風が吹き付ける。飢餓のなかでの芋畑造り、炭焼きのための材木運び。そして学校の教科書の中の、軍国主義的記述部分のスマリ抹消。

やがて占領軍-進駐軍の米兵たちが、ジープに乗ってやってくる。恐れていた米兵たちは、明るくやさし

く「赤や青や黄色で彩られた包み紙のキャンディ」をくれる。チョコレートにチューインガム。「舌から喉にひろがる美味という感覚」が子供たちの米兵に対する敵意を一挙に霧散させる。

学校に民主主義が入ってくる。「男女七歳にして席を同じくせず」のそれまでの道徳に反して、男女の児童が隣り合わせに坐らされる。これが民主主義だ。

日本の兵隊たちも国外の戦線や、国内の兵営から次々に帰ってくる。なかには負傷してハンディキャップを負った人もいる。竜太たちの担任の中井駒子先生の夫、中井正夫も足にハンディを負って松葉杖をつく復員兵である。中井正夫はかつて中等野球（いまの高校野球）の全国大会で甲子園に行っている。

その中井駒子先生と正夫の指導を受けながら、竜太たちは野球にのめり込んでいく。瀬戸内少年野球団



『瀬戸内少年野球団』

阿久 悠著  
岩波現代文庫  
定価 1,160 円+税

「江坂タイガース」の誕生だ。ピッチャーは大男で少し滑稽なところもある竜太の莫逆の友、バラケツこと正木三郎、三塁が竜太、女流剣士波多野武女が二塁を守る。竜太たちの野球熱は、ついに町の代表として隣町の代表と対抗戦をするまでになっている。

そう、この時代、日本中で野球は疫病のように蔓延したのだ。なにしろボール一つあれば広場や校庭で十数人の子どもが遊べるのだ。この疫病はプロ野球がはじまり、巨人軍の赤バットの川上哲治、阪神軍の物干し竿バットの藤村三壘手、セネターズの青バットの天下弘などの英雄が出現し、まだテレビのない時代のこととて、NHKラジオの志村アナウンサーの名実況放送と共に全国に燃え盛っていく。

そしてこの時代に生まれた、竜太たち江坂タイガースの行く末は…。本文を読み、お楽しみあれ。